
ソードアート・オンライン～神出鬼没の二人組～

final

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソードアート・オンライン～神出鬼没の二人組～

【Zコード】

Z2567W

【作者名】

fina1

【あらすじ】

デスゲームと化したSAOの中で生きていく二人の男女。キリトやアスナ等『攻略組』がゲームクリアを目指していく中、自由気ままにこの仮想空間内を生きているとある一人の幼馴染の物語を描いた物語である。

- ・この物語は電撃文庫より発売中のライトノベル、「ソードアート・オンラインの一時創作小説です
- ・オリジナル主人公メインの物語ですが、基本ストーリーは原作に乗っ取ります。

独自解釈やオリジナル要素が入ってくるのでそういうのが苦手な方は回れ右を推奨いたします。

Prologue

西暦2022年11月6日。ゲーム界を揺るがすとてつもない製品が世の中にリリースされた。

『ソードアート・オンライン』

通称SAOと略されるそのゲームは初回ロットの1万本を僅か1日も経たないうちに売り切った。

このゲームの魅力は何と言つても直接神経結合環境システム、『ナーヴギア』を導入した初の多人数同時参加型RPG、VRMMORPGということであろう。

ゲームの中に飛び込む。そのゲームの中で本当に生活をしているかのような気分になれるこのゲームは買った人間を一人残らず魅了した。

そして、運良くもゲームを変えた人間が、その初めての感覚に歓喜し、酔いしれている時事件が起こった。

『ログアウトボタンの消失』

これは全神経を仮想空間に投影させるこのゲームにとつて致命的ともいえるミスだつた。全ての感覚を仮想空間に取り入れるため、現実世界の体は一切動かすことが出来ない。そのため内側からログアウトするほかに、一人で外に出ることは実質不可能なのだ。

そんな現象を見つけプレイヤーたちが混乱に陥る中、運営側から発表があるのでことで、1万人のプレイヤーがこのゲームが始まることになる。

場所、『はじまりの街』の広場に集まっていた。

なんだ、やつぱりバグか……。

全プレイヤーがそう安堵の息を吐く中、このゲームの制作者、茅場晶彦から発せられた言葉はその期待を一八〇。裏切るものだつた。

『ゲーム内の死はそのまま現実世界での死に直結する』

彼がどういった意図でこの宣言をしたのかは分からぬ。
しかし、広場に集まつた一万人のプレイヤーがこの言葉を聞いた瞬間、全員が一度絶望したことは確かだらう。

泣き叫ぶ者、怒り狂う者、今だ状況が理解出来ずその場に立ち尽くす者。

それぞれがそれぞれの反応を見せる中、この世界が期待していたゲームはその姿を一変させ、プレイヤーが本当の『命』をかけて戦う、正に命懸けの『デスゲーム』になつた。

この物語は、このデスゲームの中で生きていくと決意をした者の生き様を描いたものである。

第一話・デスゲーム

力チャツ。

俺が片手剣を目の前のモンスターに向けるように構えると、金属特有的音が静かに辺りに響いた。

目の前の敵は正に異形。

人並みにでかいトカゲが一本の足で立ち、右手に剣、左手に丸い盾を構えている姿は現実世界の生物学者が見たら卒倒すること間違いないしだな、と場違いなことを思つ。

「ギヤオオオオオ！」

そのトカゲが奇声を上げながら剣を振り上げ、こちらに向かつて突進してくる。俺はそれを限界まで引き付け、その刃が振り下ろされるのと同時に体を左へと傾けその攻撃を回避。

更にカウンター気味に奴の首目掛けて右手の剣を振り上げた。

肉が引き裂かれる独特の音と共に、奴の首が地面に転がり落ちる。クリティカル判定がなされ、HPバーが急速に現象していく。首が落ちているのに胴体だけバタバタしている光景はあまり見ていて気分が良いとはいえないが、このトカゲの右上に存在しているHPバーが1ドットもなくなると、その体を形成していたポリゴンを周囲に撒き散らしながら消えていった。

「ふう……」

トカゲとの殺し合いが終わり、まだ綺麗に輝く血漫の愛刀を腰の鞘に納めると、俺は草が地平線まで広がる草原に腰を下ろした。

「やっぱまだ」「ええわ……」

あの史上最悪の宣言がなされてから一年。『スゲームと化したこの世界で効率よく生きていくためには、いつまでも安全な町にいるわけにはいかなく、多少危険を冒しても外に出てモンスターを狩るのが一番だった。

第70層ともなると、流石に敵も強く、一戦一戦が本当に命懸けであり、2年戦つてきてもその感覚になれたことはなかった。

「いやー相変わらず綺麗な戯い方だねーハヤト」

草原に座りながら、現実世界では滅多に見られないその綺麗な風景を眺めていると、不意に後ろから声が掛けられた。

「ナギサか？ そんなんでもないよ。ほら、実際にHPバーが黄色ま

でいつちやつてるしや」

そういうて俺は自分の右上を指差した。それをみてナギサは「あら、ほんとだ」と言つて俺の隣に腰を下ろした。

さつきから話しているこいつの名前はナギサ。といつのはこのゲーム内の名前で、実際の名前は白鳥渚しらとりなぎさ。仮想空間の中にはずなのに、なんで俺がそんなこと知つているのかつていうと答えは簡単、現実世界でのクラスメイトだからだ。

同じ高校の同じクラスであるこいつをあの宣言がされた広場で見つけた時は、ほつとして何故だかお互に笑つてしまつた。
無論、その周囲の何人かにはおかしくなつたと思われ、哀れみの目で見られたが。

「そりいえばあのスキルは使つてないの？」

俺の顔を覗き込むように尋ねて来る。こいつは意識してないみた
いだけど、やけに顔が近い。思わず顔を離してしまつた。

ちなみにこのSAOというゲームは極端に女性人口が少ない。いや、いることにはいるのだが、現実世界の容姿が反映されるこのゲームにとつてナギサ程のこつ言つては何だが、美人はそうはないなかつた。

高校でも人気があつたナギサはもぢろんこつちの世界でも人気が

あり、数多くのパーティーに誘われていた。

そんな奴の顔が近くにあるとこつことで、少し動搖しながらも問い合わせを返した。

「ああ。結構まだこのスキルが何なのかすら分かつてないからな。もつと下の30階層くらいならまだしもここであれを使うのは流石に怖い」

「そつかー。そうだね。変なことが起きてそのままよなうーっていう場合もあるじ」

せひひとつ酷いことを言つ奴である。

さつきから話題に上がっているスキルというのは俺の『ヨニークスキル』である。このゲーム内の多くのスキルの中でたつた一人しか持たない固有能力みたいなものだ。

まあ俺のはゲームのバグなんじゃないかと思うんだが。

なぜなら『文字化け』しているのだ。

普通はスキルウィンドウを除けば例えそれがニークスキルだとしてもちろんと設定された名前が存在しているはずなのだが俺のそれには名前が存在していなかつた。

いや、あるにはあるはずなのだが文字がおかしくなつていて読むことが出来ない。

それゆえにそこから派生するスキルも獲得することが出来ないため、通常行われるシステムからのサポートの恩恵に預かれないとひどく制御が難しかつた。

そのためこのスキルを使ったのは50階層以前で、それ以降はあんまり使ってない。それこそここいつの言つよつにあつたり死ぬこともある。そんなことは御免だ。

「とりあえず一回町に戻ろっ！」
「いや、いつモンスターが出てくるか分からないし」

「そうだな。戻つて飯でも食べるか」

ナギサの言葉に頷きながら立ち上ると俺達はその場を後にした。

人物紹介（前書き）

人物紹介です。

グダグダと長い文章で読みにくいかもしません……；
読みにくかつた場合はご指摘ください。

人物紹介

名前：神白隼人かみしろ はやと

PC名：ハヤト

レベル：82

スキル：片手直剣スキル、曲剣スキル、索敵スキルは完全習得。適当な気分により、投擲スキルも習得。熟練度はそれほど高くはない。バトルヒーリングは一度ＨＰバーが見えないくらいの瀕死状態に陥った時に獲得した。そのほかには趣味の釣り、軽い料理などを習得している。

エクストラスキル：比較的簡単に手に入る『カタナ』をなぜか手に入れてしまい、習得した。それ以外はとくになし。

ユニークスキル：理解不能の文字化けというバグが起きているスキル。本当に訳の分からない文字の羅列で表記されてるため、そのままの派生スキルも一切習得することが出来ず、このスキルを扱うときは全て自分の管理の下に扱われる。

このスキルが発動すると、アイテムウィンドウから刀剣類の武器を4つ選択し、自分の周りの空中に待機させることが出来る。ハヤト自身これを最初に使った時は驚いたもので、「これ最早、魔法の領域なんじゃね？」とナギサに対して苦言を漏らしている。

待機させた刀剣類は任意で攻撃させることが可能。攻撃力はハヤトの筋力パラメータに比例し、スピードはそのまま敏捷パラメータに依存する。手に持つ剣もあわせて5つの剣による同時攻撃が可能のことからハヤト曰く「SAO中で最強スキルじゃないか」と言わ

れている。

しかしハヤト自身、このスキルにはあまり信頼を置いておらず、あくまでバグの下に生まれた変なスキルという認識である。

このスキルは扱うプレイヤーに絶対的な空間認識能力を要求し、それを持つていらないプレイヤーがこのスキルを万が一使用した場合、剣を空中に待機させることが出来ず、地面に落下してしまつ。

人物紹介：黒髪に少し茶髪が混じったような髪色で、ストレート。髪自体はそれほど長くなく、前髪は眉毛にかかる程度の所で止めてある。髪型は基本は何もせずそのままだが、たまに寝ぐせなどで異常な程逆立つ時がある。

現実世界では高校一年生の17歳。両親と姉、兄の5人暮らしをしている。気まぐれで応募したベータテストに運よく当たってしまい、それからSAOの世界にのめりこんでいった。部活動のサッカーで鍛えた脚力と動体視力に状況判断、そして持ち前の運動神経を生かして、常識にはとらわれない動きをSAO内では繰り広げていく。

ユニークスキルはベータテスト時にはなかつたが、製品版をもらい、ログインした時には最初からあつた。訳も分からずそのスキルを選択し、戦闘をしてみた所、やたら強い疲労感に襲われたためそれが以降はあまり使用していなかつた。

だが、デスゲームの宣言がなされナギサと合流してからは、たまに気まぐれで使うような時があり、段々とこのスキルにも慣れてきている。しかし所詮はチキンなので60層以降の階では未だに使用回数0。

ナギサとは高校での同級生であり近所。所謂、幼馴染であり兄弟のように育ってきた。それ故、SAO内でナギサを見つけた時は本当に歓喜し、喜びを分かち合つた。

身長は173cm。中学3年の時点では170cmだった身長が高校に入つても伸びると思われていたのに、まったく伸びず一抹の不安を抱いている。本人曰く「男として180cmは欲しかった」とのこと。あくまで偏見です。

性格は基本のんき。たまに変な妄想やら想像やらが暴走して人格破たんすることがあるが、数分後には自制力がナギサの突っ込みが入るので問題ない。

戦闘になると、普段からは考えられないような動きを見せモンスターを翻弄する。だがやはりチキンなので、いつも戦闘の時は基本内心冷や汗をかいている。

S A O内では一応『攻略組』の枠組みに入るが、本人はそれほど熱心ではない。レベルが82とこのゲーム内でトップクラスの高さを誇るが、本人はそれを隠し続け、クエストやら趣味の釣りなどに時間を割いている。

しかしたまには、みんなの役にたちたいなあと意味のわからない衝動に駆られ、最前線に姿を現す。その時にS A O本来の主人公、キリトやアスナなどとも顔を合わせているが、ボス攻略後すぐさま立ち去ってしまうため会話をしたことはない。

ナギサと会うまではソロプレイヤーとして生きていくつもりだったが、幼馴染であるナギサが心配でしょがなく、パーティーを組むようになった。ちなみに他にパーティーを組むのは最前線に行つた時くらいである。

デスマッチ宣言がなされた時、本人はかなり混乱していた。家に帰れなくなるだと姉や兄の家族に心配をかける、だとか様々なことを考えてしまい、一度は錯乱状態に陥りかけた。

しかしそこでナギサと出逢い、顔見知りがいるという安心感に満たされ通常の精神に戻る。

それ以降はナギサと行動を共にし、SAOを生きている。

?

名前：白鳥渚
しらとりなぎわ

PC名：ナギサ

レベル：68

スキル：槍剣スキル、武器防御スキルは完全習得。料理もそつなくこなすが、あまりしない。とにかく安全を重視したスキル配置のため、索敵や隠蔽スキルなどもかなりの熟練度に達している。

人物紹介：茶髪にショートヘア。前髪は目にかかる程度で後ろ髪は肩にややかかる程度のもの。基本活発で動き回りたいがための髪型である。

現実世界ではハヤトと同じく高校二年生。兄が買ったSAOを興味本位でログインしたところこのデスゲームに巻き込まれた。部活動は弓道部に所属。その凛とした立ち振る舞いと、活発である性格も相まって高校ではとても人気が高かった。ハヤトとは幼馴染。中学2年のころからハヤトの事を段々と意識し始めるが、本人もずっと兄弟のように見てきたため少々戸惑っている。

弓道部で培つた高い集中力と精神力を生かしSAO内を生き抜く。武器に弓がないと知った時は愕然としたが、仕方なく槍を選んだ。剣でも良かったのだが、あり当たりすぎてつまらない、という理由

から槍を選択。以降、SAO内では珍しい『槍使い』としての評判が広まり、容姿の良さも相まってアスナとSAO内では一枚看板として知られている。

身長162cm。女性としては結構高い方で、本人もこの身長に納得している。

性格は前述したとおり活発そのもの。面倒事に自ら顔を突っ込んでいき、いつもハヤトを振り回している。

戦闘ではその高い集中力でハヤトの手助けをし、補助面にまわる。実際に戦闘しても十分強いのだが、本人曰く「それはハヤトに任せておけば万事OK」とのこと。このことからもハヤトの気苦労が伺いしれる。

SAO内ではかなりの高レベルプレイヤー。本人が望んでこうなったわけではないが、ハヤトと共にダンジョンに繰り出しているうちにここまでレベルが上がって行つた。

決してハヤトに頼り切りというわけではなく、戦闘をしないと経験値も入らないことから、ハヤトが疲れた時は交代してモンスターを狩っている。

最前線にはハヤトと共に神出鬼没であり、いつも攻略組をひっかきまわしている。アスナとは何度も離したことはあるがそこまで親しくはない。あまりにも気まぐれで現れることから『神出鬼没の二人組』という愛称までついた。

しかしレベルが高く実力もあるので、最前線に姿を現したときはいつも歓迎されている。

一方、どうしてそこまで実力があるのにもかかわらず積極的に攻略をしないのかという声も出ているが本人曰く「楽しんでいきたいから」とのこと。かなりの楽観主義者である。

デスゲーム宣言当初は本当に錯乱状態に陥っていたが、不意にハヤトと合流。ハヤトと同じように顔見知りがいることで救われ、以後ハヤトと行動を共にするようになる。

人物紹介（後書き）

どうだったでしょうか。

自分でも驚くほどに長くなってしまったのですが……。

読みにくいや、ここおかしくない?などの「指摘」がありましたら感想かメッセージをお送りください。隨時受け付けております。

第一話・突然のクエスト

「ドラゴンの討伐う？」

あの後町に戻ってきた俺達だったがその後しばし自由行動を取つた。

何も俺とガガサにし」も一緒にしるわけではなく「こ」、「こ」ではよくちょく自由行動をとつてゐる。

「そもそも、ジルコンから悪い感じの鉱物がどれもあらしめてる。興味あるでしょ？」

その自由行動の後、再び合流した俺はナギサが持ってきたクエストの内容をお茶を飲みながら聞いていた。そこに描かれていたのは、簡単なドラゴンの絵とそのクエストに関する事項。パツと目を通したが、そんな簡単に行けるようなものではない感じがする。

「いや、確かに興味はあるけどさ。ドラゴンだろ？ 相当ヤバいんじやないの？」

俺のその言葉に何故かふふんと鼻を鳴らし、誇らしげに胸を張つたナギサはすぐこいつしながら俺の問いに答えた。

「だーいじょうぶーどりせせらりんのドーラゴンだからハヤト一人で行けるつー！」

「お前は？」

「戦うわけないじゃん、怖いもん」

「……そこですか」

わかつちやいたけどこつって奴は……。

「安心しなって。いつも通り、資金調達は私がやっておくから!」

そういうでバシンーーと俺の背中が叩かれる。ダメージは無いがそれ相応に痛い。

その痛みを堪えながら俺はナギサに向き直った。

「うむ。ではよろしく頼むぞ、ナギサ君」

「了解しました隊長。御武運を」

互いに馬鹿みたいに演技をしながら敬礼をすると、一人で顔を見合させて笑いあつた。

そしてナギサはくるりとその茶色のショートヘアを翻し、店の出口へと向かう。

「それじゃあハヤト! 大丈夫だとは思つけど氣をつけでね! ……じゃつ! !

そういうてナギサは店を出でいった。

俺はそれを見送った後、半分程度残っていたお茶を一気に飲み干すと、ふうとため息をつく。

「いやー相変わらず可愛いねナギサちゃんは。全く、なんでお前み

たいなのと……」

ふと、肩に何かが乗っかる違和感と共に声が掛けられた。
その声の方向を見ると、そこには俺の肩に肘をかけ、やれやれと首を振るカタナ使いのクラインの姿があった。

「クラインか。相変わらず失礼な奴だな。……」
「うちが聞きたいくらいだよ」

俺とナギサの関係はみんなにはただのフレンドということになつている。別に現実世界での友達と言つてもいいのだが、何か色々と面倒なことになりそうなので黙つているのだ。

ふと、周りを見渡せばクラインの言葉に共感した野郎共が「うんうん」と首を縦に振りながら俺の方を見ていた。

…………」
「こいつら全員オロしてやるのつか。

そんなことを本気で思ひはじめた矢先、クラインがテーブルの上にあるクエスト用紙を手に取つた。

「アリゴン狩りねえ……。これ、相当難しいらしきぜ?」

「…………」

クラインの言葉に疑問を投げかける。確かナギサの話ではそこまで強くはないと……。

「まあ確かにお前にとつちやそれほどでもない相手なんだが問題は

「いやじゃない。聞いた話じゃドライソンを倒しても鉱物が出ないらしいぜ」

「はあ？ 確定報酬じゃないのかよ？」

「俺が知るか。まつ今回ばかりは一筋縄じゃないからお前でも苦労するかもな」

はつはつは、と高笑いするクラインの声を余所に俺はこのクエストに考えを巡らせる。希少な鉱石を餌にして、毎日その体内でその希少な鉱石を精製するドライソン。そこにはそう書かれていた。

「なあ、どつか腕のいい鍛冶屋しらないか？」

俺の質問の意図が分からなかつたのだひつ。クラインは笑うのをピタリとやめ訝しげに俺の顔を覗き込んできた。

「知つてゐるには知つてゐるが……そんなもんなんで今更？」

「ああ、ちよつとな」

クラインの疑問にニヤリと口元ゆがませて返すと、俺たちはそのまま話を進めていった。

?

「うーか

あれからこのクエストについて考えた俺は、やはりこういつの専門家に聞くのが一番だと思い、クラインに腕の良い鍛冶屋を紹介してもらつた。

町の裏道にあるこの店は、かの『閃光』も愛用していると聞いて、俺はここしかない！と思い、飛んできたのだ。

そんな訳で、今俺は第48階層の街『リンクダース』にある『リズベット武具店』の前に来ていた。

「すいませーん……」

初めての店のドアを恐る恐る開ける。このゲームをしていく上で、この感覚には多少慣れたものの、やはり知らない場所に入つて行くのは少し怖い。

体を小さくさせながら店内に入つていくと、そこには椅子に体をもたれさせながら眠りに着く少女の姿があった。

そのまま近付いて行き、まるで人形のように眠る彼女の肩を悪いと思いながら揺する。

「おーいキミー…………」

起きない。

というかこのウロイトレスみたいな服装で鍛冶をしているのか。すこし想像がつかないな、と思いながら、先程よりも少し強く肩を揺すつた。

「はうー？生きてますかー？」

起きない。

死んでんのか。そんなことを冗談で思いながら意を決した俺は、今だ熟睡する少女の目の前に立つた。
そして両手を広げ

パンッ！－！

「ひゃあっーー？」

強烈な炸裂音と共に眠っていた少女の体が飛び起きる。彼女は急いで辺りをキョロキョロと見回した後、目の前にいる俺と目を合わせた。

若干、涙目になっている。なんかすごい罪悪感に駆られるが、それをグッと堪え話を切り出した。

「あ、あの頃がこの店の店主かな？」

おそるおそる聞いてはみるものの、涙目まま彼女はひきりこらみ続けていらっしゃるわけだ。

嫌な沈黙の後、一言だけ少女が口を開いた。

「
はい」

ああー怒つてらっしゃるーもつ誰が見ても分かるくじこに怒つてらっしゃいますよこの子ーだけども！

そんなピンクの髪で、ウエイトレスみたいな恰好したまま怒つても！ただ可愛いんだけどなんだよーー！

……取り乱した。話を元に戻そ。

「えっと、Jのクエストについて何か知っているかな?」

ナギサから渡されたクエストのビラを手渡すと、少女は一瞬目を開いたが、すぐまた先ほどの怒ったような表情に戻りビラを返してきた。……だから、可愛いだけなんだって。

「白龍、ですか。確かに数限定の希少クエスト、ですよね。珍しい鉱物が取れるとかなんとか……」

「うん、そりなんだけど、予想以上に難航しているみたいでや。Jのこの辺のことは専門家に聞くべきかなあと思つてきたんだけど」

やはり鍛冶屋としての本能がうずくのか、表情に出れないよう努力してはいるようだが嬉々としているのが目に映る。Jの調子で怒りも収まってくれればいいな、と思いながら話を進めていく。

「ジラーハンを狩るだけじゃダメみたいですね。私も現場に行つたことがないので何とも言えませんが」

あっちゃん。Jの調子だとあんまい情報は聞けそうにないかなあ。なんか嬉しいながらも悔しそうな表情してゐし。ふー、無駄足だつたかな……。

「そつか。しうがないね。やつぱり現場に行つて試行錯誤してみるしかないがあ」

諦めの感じが入つたように俺が呟くと、リズベットが突如その体を乗り出しこんな提案をしてきた。

「あ、あの。わたしもJの希少金属について興味があるので、

連れて行つてはもらひませんか？「

……なんと。あんなに怒つていたであろう彼女が自らそんなことを言つてくれるとは。

俺としては魅力的な提案だつた。やっぱりその道の専門家がいるのといひのでは、効率とかが全然違つてくるし、そもそもその鉱石を見つけたとしても俺が見分けられるかも心配だつたのだ。

故に、俺がこんな魅力的な提案を断るわけもなく。

「ほ、本当か！？そりゃー助かる！是非頼むよー！」

満面の笑みを浮かべながら俺が右手を差し出すと、彼女も同じようく笑い俺の右手をとつてくれた。

というわけで俺はリズと一緒に第55階層にやってきていた。第70階層の敵に比べればここは通常モンスターはそれほど強く、簡単なスキル一発や硬くとも一発当てれば倒せる程度の敵だった。

それ故に何も心配はないはずだったのだが……。

「………… れむつ」

ふと、リズの口からそんな言葉が漏れた。

「おいおい、大丈夫か？」

「うん。あーもう何だってこんな氷山地帯なのよ…………」

そう、ここ55階層の俺達が目指す目的地は氷山地帯に設定されていた。別に寒いからといってHPにダメージを受けるわけではないのだが、それでもやはり気分は優れない。

今だ自分の肩を抱くようにして震えているリズを横目に、俺は右手を振りアイテムウインドウを開けた。そこにある白いコードを選択しオブジェクト化せると、そのまま彼女に投げ渡した。

「ほいっ」

「うわっ、ととっ。………… いいの？」

俺の投げたコードを若干慌てながらもしっかりと受けとると、そのコードを握りしめながらそんなことを聞いてきた。

「おひ。寒くてモンスターにせりれましたーなんて笑い話にもなんからな」

「……ハヤトは？」

「俺は気合いと根性だけでいけんだよ」
なにそれ、と笑いつつ俺の渡したコートを羽織る。文句を言いつも着てくれるし、なんだかんだいって幸せそうな顔をしてくれるでこっちも嬉しくなってくる。
ああそれともちろん俺の身長に合わせてこのトレーニングコートである。だから俺よりも身長が低い奴が着ると……

「…………ふつ」

「な、なに笑つてんのよーー！」

「似合わなすぎや……ーーー！」

「つむせこわねつーー仕方ないでしょーー身長高くないんだからーー！」

もはやコートの裾が地面に付くんじやないかといづくらいにぶかぶかである。もちろん袖も途中までしか腕が入らず、先の方は垂れ下がっていた。

小さな子供が見栄をはつて無理に大きなコートを着ているような感じがしてならない。しかもそれがまた妙に似合つていて可笑しさを引き立たせる。

溢れ出して来る笑いを必死に堪えながら俺は先を急ぐように促した。

「わ、悪い悪い。ほら、先急いで。口が暮れる前には山頂に着きたいだろ?」

「誰のせいだと思つてんのよ……」

リズが何やら呟いているが聞こえない。

俺は雪が積もっている地面を踏み締めながら未だ聳える山頂を目指した。

あれから約1時間ほど歩くと今までより少し開けた場所にでた。見渡す限りではこれより上は無い。恐らくここが山頂なのだろう。辺り一面に氷柱が生えており、それ以外は一面の雪景色。目の前には直径数十mはあるであろう穴が空いており、下を覗いてみればリズベットが思わず「ひええ……」と驚きの声を上げたほど深かつた。

「白竜なんてどこにもいないじゃない……」

リズから愚痴が漏れる。確かに辺りを見てもドラゴンなんて神々しい生物の姿は見えず、一面の青空の雪景色が広がっているだけだが……。

「気を抜くなよ。どこから現れても不思議じゃ」

俺がリズに忠告をしようとしたその時だった。

ギャアアアオオオツ！！

突如、咆哮。

俺とリズが跳ね上がるよう視線を上空へと向けると、何もなかつたはずの空間に無数のポリゴンが現れる。それが互いにぶつかつくつきあつてすぐに俺達が探し求めていたモンスター『白竜』の姿を作った。

「隠れろッ！…！」

俺が叫ぶとリズはすぐに近くの氷柱へと身を隠す。そして柱の陰から顔だけを出すと俺に向かって叫んできた。

「えつとー・ド・ラ・ゴンの攻撃は左右の鉤爪とブレス、それに翼による突風攻撃だよ！…！」

咆哮の余韻がまだ辺りに反響する中、俺にそれだけを伝えてくれた。

俺はその言葉を確かに聞き取るとリズに向かって右手を揚げる。そしてそのまま下ろした右手で左腰に差してある愛剣を抜き取ると、空中に浮かぶ絶対的な存在感を放つ白竜と相対した。

白竜はここは俺の縄張りだと言わんばかりに山頂周辺をグルリと滑空すると、突如山頂にポツリと立つ俺に向かって翼を広げ突撃を開始する。

「やつば……！…！」

不意をつかれ反応が一瞬だけ遅れる。気が縮む思いで横つ飛びすると、俺が先程までいた場所を白竜が滑空していく。奴はものすごい量の雪を巻き上げながら再び空へと舞い上がった。

空へ上がられはどうしようもない。普通のRPGならば魔法

等で対処するのだろうが、生憎SAOにそんなものは存在しなかつた。

今度こそは、と俺は再び剣を構える。不意打ちは一度は通じない。今度こそ捕まる

!!

白竜は再び空を旋回すると先程と同じように俺に向かってきた。剣を正眼に構えそれを迎え撃つ。今度はサイドステップで突進を交わすと交差法気味に通り過ぎていくデカブツを一閃。相当な衝撃に剣を持って行かれないので両手で剣の柄をにぎりしめる。

「つ
うおおひらあッ！…！」

そのまま剣を振り抜く。

無数の鱗を撒き散らしながら白竜は苦悶の声を漏らした。そして……

再度、咆哮。

最早飛ぶことは止めたのか、その強靭な両脚を地に付け、怒り心頭といった様子で俺を見据えて来る。

水晶のように透き通った瞳が俺を見据える。

みづちやく奴を地に引きずり下ろした。後は攻撃をかい潜つて奴にダメージを与えるだけ。奴との距離はそう遠くはない。

白竜はまた咆哮をあげると体を反らしその口に息を吸い込みはじめた。ブレスの予備動作だ。

(……！しめた！！)

咄嗟にアイテムウインドウを開き投擲アイテムであるダガーを選択。それをプレスを吐こうと大口を開けている白竜へ投擲。それと一緒に走り出した。俺の投擲スキルはそれほど高くは無いが、あれだけ的が出かければさすがにATARU。

まさか予備動作中に攻撃されるとは思つていなかつたのだろう、白竜は飛んで来るダガーに対応出来ずそのままそれは口内へと突き刺さつた。その痛みにより白竜が『一瞬』怯む。

その『一瞬』の内に俺はドラゴンの懷へと潜り込み両手大剣スカルを発動。青いエフェクト光を発しながら大剣は弧を描き白竜の体を切り刻んでいく。

目にも留まらぬ四連撃。足元に集中された攻撃で白竜は完全に体制を崩し、地にその巨体を放り投げた。

まだHPバーは残っている。俺は止めをさそぐと大剣を握った両手を振り上げ

「すごいよハヤト！強いとは思つてたけどこれほどとは……」

不意に、リズの声が聞こえた。

そのことに動搖したのか俺の両手は振り上げたまま止まつっていた。俺は慌ててリズに向かつて制止の声を叫んだ。

「ば、バカ！まだ出てくるなっ……」

完全に倒れたと思っているのかリズは白竜のすぐ傍までやつてきている。

「な、なんで？もう倒したんじゃ

モダニズム

「リズミ！」

時間が経つて意識が戻ったのか、ドーラ「」は態勢を立て直していた。

そしてそのまま近くにいたリズベットを尻尾で強襲、その衝撃で余りにも簡単にリズベットは宙に舞ってしまった。

גנוב – יונתן רון

落ちるその先は最初見たときリズベットが恐怖していたあの穴。俺は持てる限りの力を振り絞りリズベットへと駆け寄る。

キルウインドウのある部分をタッチした。

穴へと迷い無く飛び込む。重力に従い落ちていく中、俺はリズ

「手を掴め！！

俺の言葉を聞くやいなやすぐにリズは右手を俺の手に伸ばしてきた。

俺はそれを掴むと自分の方へリズを抱き寄せ、自らのスキルを展開させた。左腕でリズを抱える。そして残された右手を空中に水平に走らせると途端に俺の周囲に4本の剣が現れた。

その内、大剣の一本を俺の足元に移動させ足をかける。大剣の腹をボードのようにして乗ると落ちるスピードが次第に減速していく。

しかし、それも束の間。俺達の体重に耐え切れなくなつた大剣は、すぐに下降を始め速度を速めていく。

「アリババ」

咄嗟に自分の体を下にしゃがて来るであつた衝撃に備えた。

そして、着弾。

まるで爆発でも起こしたかのように周りの雪を巻き上げ俺達は地面に叩き落ちた。

なんとか意識を保ちながら強打した頭を押さえつつ田を開くと、田の前にはリズの顔。いつもなら恥ずかしくてやらしてしまつ田線も、そんなことは気にならなかつた。

「生きてる？」

「うん」

たつたそれだけ。それだけの言葉を交わした後、俺たちは互いに笑いあつた。

「ははっ。あはははーーー！」

本当に死ぬかと思つたからこそその心からの笑い。生きている事が不思議でしょがなく、今は笑うしかなかつた。リズは俺の上からどくと、感謝の言葉を口にした。

「ありがとうね。ハヤトが助けにきてくれなきや、今頃私は……」

「いいつて。パーティーなんだし、助けるのは当然だわ」

リズが何を言おうか分かつていたので、遮るような形で返事を返した。一瞬ポカンとなつていつちを見つめきたが、すぐに笑顔に

なるともう一言だけ、ありがとー言つて空を見上げた。

「白竜、もうこないかな」

若干、不安気に空を見上げながら呟く。俺も同じように空をみると、時折咆哮を上げながら白竜が六の周りを低空飛行していた。確かにパツと見は今にも入ってくるかのような仕草だが、幸運にもそんな気配はない。俺はそれを確認すると、地面に突き刺さっている5本の内の一本を抜き取り、左腰の鞘におさめた。

その後、展開していたユニークスキルも解除する。解除すると、突き刺さっていた残りの4本がポリゴンをまき散らしながら空気中へと消えていった。

「大丈夫だろ。多分ここは不可侵領域だ。幸いモンスターもポップしないようだしちょっと休憩しよつ」

「あ、うん」

一通りの事を終えるとリズに声をかけて俺も地面に腰を落ち着かせた。

そしてアイテムウィンドウを操作して、ポーションを一つ取りだす。

「ほれ」

2つ取りだした内の1つをリズに投げ渡し、ジェスチャーで飲むように伝える。リズは「ん」とひとつだけ返事すると栓を抜きとりその中の液体を口に流し込んだ。

俺もそれを見て同じようにポーションを飲み干す。甘いような酸

つぱいような訳の分からぬ味が口の中を満たすと同時に俺のＨＰバーが黄色になっていたのから安全圏の青にまで回復していった。

ポーションを飲んだ後、空の瓶を破棄しもう一度空高くにある穴の出口を見上げる。まるで光の円のように見えるそれは、思った以上に高くてとても登れるようなものじゃなかつた。

「どうしたもんかねえ……」

脱出方法が見つからない。俺が頭を悩ませていると、リズが横から話しかけてきた。

「転移すればいいんじゃないの？」

「やつてみ

俺がそう言つとリズは訝しげに俺の方を見ながらも、メニューを操作し転移結晶を手の上にオブジェクト化させた。そして一言叫ぶ。

「転移！－リングダース！」

……何も起きない。

というか起きるわけがないのだ。ここは元々プレイヤーを落とすための罠みたいなもの。そんな簡単に抜け出すことが出来たのなら罠の意味がないし、作る理由も存在しない。

「結晶無効化空間…………？」

「正解～」

よくできましたーと褒めてやると、なぜかリズは顔を赤くして俺に詰め寄ってきた。

「分かってるなら何で教えてくれなかつたのよーー。」

「面白そつだつたから」

むきやーと言つた風に怒るリズ。やっぱこいつ面白い。いつまでもからかつていていい衝動に襲われるが、生憎そんなことをしている暇も余裕もないのでもわざと脱出方法を見つけるため頭を働かせる。

穴の中全体を見回した所、抜け道や通路のようなものは存在しなかつた。ここはダンジョン扱いだからナギサとかに助けを呼ぶこともできないし、まして穴の高さは「〇三メートル以上はあるだらつ。

「ロックライミングしてみよ! ゼ!」

「……は?」

意味が分からぬ、といつた様子のリズを目で黙らせると、メニューを操作して短剣を「一つ両手にオブジェクト化せよ。そしてそれを逆手に持ち、壁の近くまで行く。

そして出来るだけ高くジャンプして距離を5mほど稼ぐと、そのまま右手に持つ剣を壁に突き刺した。

そのまま左の剣を少し上に刺し、腕だけの力でそれを昇つていいくところ計画だ。

と、いう計画だったのだが。

「……あれ、抜けねえ」

左手の剣を刺したまでは良かった。次に右手の剣を再び上方に刺そうとしたときアクシデントが起こった。

壁に突き刺さったままの剣が全く微動だにしないのだ。思えばこんな足が宙ぶらりんの状態で力など入るわけもなく、ジャンプの衝撃を完全に抑えようと思ったため深くまで入った剣を抜くことなど出来るわけがないのだ。

「あ、これ無理だわ」

俺は即決すると剣から手を離し落下する。今回はさほど高くはないのでダメージはないが、結局雪を大いに巻き上げただけの結果になつた。

雪煙りが晴れていくとそこにはリズの冷たい視線。

「……あんたバカ？」

「……つぬやいよ」

軽く傷ついた。

第二話・encount (後書き)

とつあえずあと一話ほどはリズ編が続きますが、じつは承下せよ(

—) m

第四話・解り合つ一人

結局脱出の糸口も見つけられないまま、時間は過ぎていった。上空を見上げれば、穴の底を照らしていた夕陽も沈み辺りはどんどん暗くなつていく。やがて陽が完全に没すると、穴底は何も見えないくらいの暗闇に包まれた。

アイテムウインドウからランタンをとりだすと、火を灯し地面に置く。火の暖かさで置いた周辺の雪が解け液体となつて地面を濡らした。

「暗くなつて不用意に動き回るのもアレだし、今日は野宿だなあ…」

リズにとつては嫌なことこの上ないことだらうが、この際仕方がないのだ。

暗い分、辺りが見えず何かしらの怪我を負う可能性が大きくなつてしまふ。そんな時は動かないことが一番利口な手段だと俺は考える。

「仕方ないわよね。でもそんな道具あるの？」

リズの疑問に俺は得意げに鼻を鳴らすと、アイテムウインドウを操作して愛用の野営グッズをオブジェクト化させた。ベッド二つにテント。それに鍋に火に様々な食材。ちなみにテントの中は暖房も付いている優れ物である。

「アンタ、こんなのいつも持ち歩いているわけ？」

田を丸くさせ驚きを隠せないといった様子でリズが俺に問いかけてくる。

大体一人とかナギサと一緒に狩りに行くとき、「こうこうのを持つていく役割は俺なのでいつの間にかこのセットを持つていくのが当たり前になってしまっているのだ。

「おう。こんな風に野宿するのも珍しいことじゃないからな。何時でも俺は準備万端だぜ」

呆れていいるのか感心しているのか、それとも両方なのか色々が混ざったような視線を送つてくる。そんな視線は送られ慣れてるぜ。最前線に行つた時も、こんな時があつたがあの時はもつと人数が多くて流石の俺もくじけそうだった。でももう一人俺みたいのがいてそいつとは何か通じ合える気がした。……話してないけど。

「まついいから寝てみるつて。このベッドすうじい気持ちいいんだから」

そう言つて俺はベッドに飛び込む。

見た田はやや固そつだが実はそんなこともない。飛び込むと体を包み込むように、ふかっという感触があり3分も横になつていればすぐに眠れそうなほどである。

「うわつまんとだ。ふかふか

隣を見ると俺と同じようにベッドに顔を埋めて触感を堪能して

いるリズの姿。気に入ってくれたみたいである。

「さて、飯にするか」

さすがにいつまでも感触を楽しんでいるわけにはいかないので、俺は立ち上ると出した食材を使って料理を作りはじめる。……うん、パスタとかでいいかなこれなら。

「料理なんて出来るの?」

「それなりにな。ソロプレイするときには結構大切なんだよ」

食材を切りながら質問に答えた。切った食材をフライパンに入れて炒めていく。ナギサから貰つたお手製の調味料を振り掛けると穴の中に香ばしい匂いが広がつていった。

「ふーん……」

ベッドに腰掛けたままリズは何故か押し黙る。何かを聞きたいけど聞けない、といった様子だ。まあ何を聞きたいのかは大体わかるけどな。

さて、最後に少し固めに茹でたパスタ（自家製）も入れて炒めていた食材と混ぜ合わせると、SAO版ペペロンチーノもどきが完成した。出来たそれを皿に盛り付けリズに手渡す。

リズは両手で皿を受け取ると、どこにあつたのかフォークを取り出し食べはじめた。

「…………おいしい」

「そりゃ あ良かった」

どうやら満足していただけたらしい。俺も自分で作ったパスタをフォークで巻き取って口に運んだ。

…………うん、まあこんなものだろう。ナギサの作ったのに比べれば数倍は劣るもの、自分的には満足のいくものに仕上がっている。そうやって俺達は談笑をしながら時間を過ごしていく。

「さて、そろそろ寝るかあ」

俺がそつこつベッドに潜り込むと、隣のベッドにリズが潜り込む。

そして顔を見ると、ふと田が合つた。

沈黙。

あんまり意識していなかつたけどこんな風に異性の誰かと寝るのは（決してそういう意味ではない）ナギサを除くと初めてだった。ナギサと初めて野宿した時もこんな感じの恥ずかしさがあり、

会話もあまり無く睡眠についてしまった記憶がある。

やばい、恥ずかしいぞこれ。

そんなことを思いながらも俺達はどうとも口を開けようとまじめなかつた。

何分かくらこそうしていると急にリズが笑いはじめた。俺もそれにつられて笑つてしまつ。

「なんか不思議な感じがする。誰かといふ風にするのって初めてだから」

「どうやらリズもおなじような感じだつたらしい。

「まあ鍛冶ばっかやつてひきもつてそつだからな

「あ、そんなことないよーー」

真つ赤になつて否定する彼女を見てまた笑う。それを見たリズは何か言い返そうとしていたがそれを飲み込んだ様子で、深刻な感じに表情を変えて口を開いた。

「ねえ、ちょっと聞いていい?」

「おひ

何を聞きたいのかは分かつてゐるつもりなので即答する。リズは目を閉じて少し黙つたが目をあけると質問をしてきた。

「あのスキルは……？」

予想通り。余りにも予想通りすぎてまた笑いそうになるがそういう雰囲気でもないので堪えて質問に答えた。

「俺のユニークスキルだよ。名前はわからぬけど最初から俺のスキル欄にあつたんだ」

「名前がわからない…………？」

「文字化けしてるんだ」

俺の言葉を聞いた途端リズは頭を抱えた。何かもう訳がわからぬといった様子で。

「変だ変だとは思つていただけどまさか……」

……そんな風に思われてたのか。

リズの衝撃告白に心をくじかれそうになるがグッと堪える。ここで負けたら男じゃねえ！！

「それで、どういったスキルかきてみてもいい？」

「あいよ」

俺はリズの要望に応え、俺の訳のわからないスキルについて説明していった。

スキルについての説明を一通り終えるとリズが口を開いた。

「なんでもないわねえ……」

「だるー？」

それだけ言つて乾いた笑いを漏らした。このSAOといつ世界の中で剣を空中に待機させるなんてことが出来るのは俺くらいのものだ。何せこの世界には『魔法』という概念が存在しない。Swodd Art Onlineというほどなのだから全てが『剣』で構成されている。『ソードスキル』といつた類のものもそういうわけであるし、槍や棍棒などもあるにはあるが、使う人はそんなにない。ちなみにナギサは槍使いだ。

「じゃあ後もう一つ質問」

「ん？」

布団から手だけを出し、人差し指を立てながらリズはそう言つた。寝ながらやつているものだから結構無理な角度で手首が曲がっている。結構つらそうだ。

俺がそんな関係のないことを考えていると、リズは再び重い口を開き言葉を紡いだ。

「どうして、あの時助けてくれたの？」

あの時 　　「こうのは穴に落ちた時のことだろ？か。

「逆に聞くが、なんでそんなことを聞くんだ？」

俺にはその理由を問う意味がわからなかつた。なぜなら、そんなことは分かりきつてははずだから。

「だって、下手したら死んじゃうかもしれなかつたんだよ？助かる保障なんてどこにもなかつた。ハヤトのそのユニークスキルがあつたとしても、助かる確率なんてほんとに低かつたのに……」

なるほど。どうして自分の命を賭けてまで、私を助けたのか、どうつまりそういうことが言いたいのか。

『』での『死』は現実世界での『死』に直結する。これはただのゲームではない。HPがなくなつて死んでしまつたら都合よくリセットなんてことはできないし、ゲームオーバーになつたらコンティニュー画面が出ることもなくただ死んで行つてしまつ。

それが分かっているからこそその疑問なんだろうなあ、と俺は思つた。

「なんでかと、言われてもだなあ。俺にはそれが当たり前のことがだつたし、理由なんていらないと思う。ただあえて言うとするならば、『死なせたくなかつた』それだけだと思つよ」

それに仲間を死なせたら夢見が最悪だ、と俺は笑いながら付け足す。本当にそれだけだ。というかあの時はリズを助けることで頭がいっぱいそななことを考える余裕もなかつた。気が付いたら走り出していて、穴に飛び込んでた。だからそこに確固たる理由なんて

存在はしなかつたのだ。

俺が笑っていることに疑問を感じたのか、未だ納得しないといった様子でリズが再度口を開く。

「キミは、死ぬのが怖くないの……？」

本当にどうして。リズの言葉からはそんな感情が読み取れた。必死の思いで声を出したのだろう、その声は震えていて、目は今にも泣きそうだった。

「怖いに決まってる。まだ現実世界でやり残したことなんてたくさんあるし、こんな訳の分からぬ中で死ぬなんて、それこそ死んでも御免だ」

じゃあどうして。言葉には出さないが目で俺に訴えかける。俺はそのままを見て続けた。

「だけど、自分の命欲しさに他人を見殺しにするなんて嫌だ。二人とも助かる可能性があるのにもかかわらずに、だ

「でもつ！一人とも死ぬ可能性だつてあつた！！」

リズの出した大きな声は穴の中を反響を繰り返して、出口へと飛んでいく。

必死の思いで反論したリズの目からは大粒の涙があふれ出し、体が震えているのが布団の上からでも見て取れる。それは、決して寒さのせいだけではないだろう。

「そうだな。だけど俺は助かる可能性に賭けた。もちろん死んでや

るつもりなんてなかつたし、絶対に助かるヒビにかで思つていたんだと思つ」

泣いているリズの頭をそつと撫でる。正直、すこし緊張したけど泣いている誰かを落ち着かせるにはこの方法が一番だと思った。人の温かさを感じられることで、人間は安らぎを得られると何かの本で読んだこともあつたから。

暗い暗い穴底にリズの嗚咽だけが響き渡る。それはとてもとても小さな声で、10mほどの穴底にも反響する」と無く暗闇の中へ消えていった。

「一つだけお願ひしてもいい?」

「なんだ?」

「私が寝るまでずっとここにしていて」

……ヤバい。いろんなことが初めてすぎて頭がうまく回らない。頭を撫でるなんてことをしたのは、ナギサ以外にしたことはないし、こんな要求をされるのは生まれて初めての経験だ。

顔が熱い。多分今俺は相当赤くなっているんだろう。辺りが暗くて本当によかつたと切実に思つ。

「……おつかれ」

心臓の音がバクバク煩い中、その一言だけを必死でひねり出した。

「ありがとう……」

俺のその言葉を聞いて安心したのか、リズは幸せそうに笑うと徐

々に目を閉じていった。そして規則正しい寝息を立てながら眠りに入った。

『ありがと』。この一言だけで俺は今日一日分の苦労が報われた気がした。とてもそこなことだけど、それだけで本当に幸せな気持ちになる。

頭をそっと優しく撫でる。リズの髪の毛はとてもさらさらしていて、俺にはとてもそれがゲームの中のものとは思えなかつた。

第五話・Claim Sola's

田が覚めると辺りに香ばしい香りがしていることに気付いた。田は既に昇つていて穴底まで朝日が入り込んですっかり明るくなっている。

香りがしている方向に視線を送ると、エプロンを着たりズが鍋を使って何かを作っていた。きっとスープか何かだろう。

俺はベッドから少し急いで体を起こすとリズの方まで歩き出した。足音に気付いたのかリズは鍋から眼を離すとクルリと反転し俺を見る。

「おはようハヤト。少し寝過ぎじゃない？」

少しからかうような感じに尋ねて来る。時刻を見れば既に9時を回っていた。俺はいつも7時くらいに起きているから確かに少し寝過ぎたかもしれない。

「おはよう。誰かさんのせいで昨日は散々な目に遭つたからな」

仕返しとして冗談混じりに反論を返す。もちろん本心で言つてゐる訳ではない。リズもそれを分かつてゐるため少しだけ頬を膨らませると鍋の中身を搔き混ぜはじめた。

「今朝食作ってるから。ハヤトには及ばないけどまあくはないはず」

「ああ、ありがとう助かる」

作ってくれるというのなら断るはずがない。俺はお礼だけいうと、その隣に座り朝食が出来るのをノンビリと待つた。

リズが作ってくれた朝食を食べ終えると俺達は昨日に引き続きこの穴から出る方法を模索し始めた。

しかし、一日寝ただけで策など思いつくなく、俺達はまた苦戦を強いられていた。

「実際この穴って何なんだ？トラップにしてはあからざりますぎるし、強いモンスターが出る訳でもない。ただの穴といえばそれまでだけ……」

落ち着かない俺は歩きながら考えを巡らせる。考えることで頭が一杯だったのか、地面から出でていたナニカに躊躇なく俺は派手に口ヶた。

「いっ……え～～……」

「……ふつ」

頭をおさえながら起き上がる。口ケたことが面白かったのか隣でリズが口を手で抑えて笑いを堪えていた。

「笑つてんじゃねえよ…………つと？」

笑つているリズに愚痴を漏らしながら躊躇いた所を見てみると、ナニカが太陽の光に反射して輝いているのが目に映った。

「なんだこれ？」

雪に埋もれているそれを両手で掻き出してみる。それは段々と姿を現し、最後には完全にその姿を晒した。

「これは……」

「クリスマスライト……！」

太陽の光に照らされて、水晶の限界まで磨ききつたような輝きを放つソレは俺たちが今回のクエストでまさに狙っていたものだつた。街の人たちに聞いても詳細は一切分からなかつたこれが今俺の手の中にある。すごい偶然に俺は少し放心状態になつていた。

「ハヤト、ここひいて……」

リズが言葉を濁す。

俺も同じことを思つてた。あの白竜は水晶を食べて成長する。そしてそれを体の中で蓄え、希少な鉱物を精製すると書かれていた。ということはその精製されたはずのものがあるということは二つは

ギヤアアオオオオオ！――

俺とリズが同じ結論に至つた瞬間、聞き覚えのある咆哮が雪山一帯を支配した。この地の王　白竜が自らの支配する地の巡回を終え帰還した。穴の出口からその神々しさをも持つ体を目一杯に広げ、地に降りる。そして侵入者を見つけた王はそれらを排除するための行動に移つた。

「ヤ、ヤバイヤバイヤバイ！――」

「早く……」

突然の出来事にクリスタライトを手に持ったまま硬直してしまった俺を、リズの声が解放してくれた。俺に向かって飛来してくる白龍の鉤爪を皮一枚でかわすと、リズが身を隠している水晶の柱へと身を隠す。この穴底に存在するこれらは破壊不可能オブジェクトであつドランの攻撃によつて壊されることはない……はず。

「どうするのよー。こんな狭いところじゃまともに戦えないわよー。」

狭い物陰に身を寄せ合つて隠れる。リズからの怒声が飛ぶ。俺もそのくらいわかつていた。

水晶柱は四つ。この直径10mほどの穴底でそれらをうまく活用してあの白龍と戦えるかと言わると、難しいと言わざるを得ない。上のよだな開けた場所なら倒せる自信はあるが、如何せんこの穴底は狭すぎた。

「あ

「何が思ついたのー!?

行ける。これなら戦わずとも外に出られる一わざわざ翼をもつ生物が降りてきてくれたのだ。それを使わない手はない。

「悪いリズ。少し目をつぶつてくれ

「ふえ?
ちよ、さやあー!」

未だ状況を読みこめていないリズだが、生憎状況を説明している暇などない。

俺はリズの体を左手で抱え込むように抱ぐと、柱の陰から抜け出した。獲物を見つけた、と言わんばかりに白竜の水晶のような瞳が俺を凝視する。しかしそれは一瞬のことで白竜は咆哮するとブレスの態勢に移った。

ブレスが白竜の口から吐かれると同時に俺は穴底を円を描くようにして回り始める。俺が出せる限りの全速力。周りの景色が飛びよう流れていく。ブレスを回避し、半周したところで急ブレーキをかけた。

ブレスの反動で白竜は未だ動くことが出来ない。俺は跳躍し、未だ硬直状態にある白竜の背中に飛び乗った。

グアアアアアアアア！－！

背中に乗った違和感に白竜は体を揺さぶる。鱗に必死でつかまりながらそれをやり過ごすと、白竜は翼を大きく広げた。穴底にもうすぐでぶつからんばかりに翼を広げると穴の出口に向かって急上昇を始める。

「まつてましたあああああ－！－！」

白竜の背中につかまりながら叫ぶ。急上昇によつて生じる強風に全身を晒しながら、俺は喜びをあらわにした。光が大きくなつていく。そしてどんどんと近くなつていく光は、円形の出口を超えると俺の眼前一杯に広がつて行つた。

「リズ！－眼を開けてみろ！－！」

俺にそう言われてリズが恐る恐る瞼を開いて行く。途中まではビクビクしていた瞼も途中から田の前の広大な風景を写すと、一気に

パツと開いて行つた。

「わあ……！」

リズが感嘆の声を漏らす。それほどまでにこの景色は綺麗だつた。真っ白な山の麓には小さな村が見え、それ以外は一面の雪景色。雪も降らず空は快晴で雪がキラキラと太陽に反射している。上を見ても下を見ても眩しくて、本当に綺麗としか言いようがなかつた。

地上40m程行つたところで白龍の背中から手を離した。体が浮遊感に包まれるが恐怖は全くない。リズと手をつなぎ共に地上へと落ちていく。

「楽しかつたよ！……ありがとな！」

「俺もだ！……またい！」

「うん！……」

強風の中でも言葉を交わす。ほとんど声は聞き取れなかつたけど、目の前にいるリズの表情と辛うじて聞き取れた言葉の断片から読み取つていつた。

色々大変だつたけど本当に楽しかつた。あつといつ間に過ぎてしまつた時間を落ちていく中俺はずつと思い返していた。

？

雪山を下り、俺たちは再びリズベットの店に戻ってきた。
何で戻ってきたか、それは手に入れた『クリスタライト・インゴ

ツト』を素材として、俺の武器を作つてもうつためだ。俺の剣はほとんどがアイテムドロップで手に入れたもので、オーダーメイドで作つてもらつたものはない。そういう機会も今までなかつたし、知り合いもいなかつたから作りうとも思わなかつた。

だけど、雪山から降りてくる途中、リズが「クリスタライトで武器を作らない?」と言つてくれたので、それを了承したというわけだ。鍛冶スキルがない俺がクリスタライトを持つついても宝の持ち腐れだったので、俺としてもそれはありがたい提案だつた。

「どうだ?いいの作れそう?」

例の鍛冶スタイルに着換えたリズに声をかける。ハンマーを持つ姿は流石に様になつていて、心強さを感じられた。

「んー、やつてみなきやわからなーいなあ。私もこんな鉱石使うの初めてだし、武器の製作自体も結構シビアだから

そう言いながらインゴットを火に入れ、リズは武器を作り始めた。ここからは職人の領域なので俺の立ち入る隙はない。今の俺に出来ることと言えば、リズの集中力を削がないように、じつと黙つていることだらう。

そう思つた俺は、椅子に腰をかけカーンカーンと心地よく響くハンマーの音を眼を閉じて聞いていた。

?

「おーい、起きろー。出来たぞー」

む……。何時のまにか寝ていたらしい。眼を開くとリズがハンマーを抱えて俺の前に仁王立ちしていた。一瞬それで殴られるかと思ったが、そんなことをした覚えは一切ないのですぐには頭を切り替える。……正直ビビった。

「じめん、寝けやつてた。出来た?」

「まつたぐ……出来たよ。ほら」

リズはため息をつくとアイテムワインドウを操作し、一つの剣をオブジェクト化させた。瞬間、辺りが光に包まれる。

「まぶしつ……」

腕で眼を覆つて眩しさを防ぐ。5秒ほど経つてその輝きが徐々に薄れていいくと、俺はよみやくその剣を直視することが出来るようになつた。

その剣は、まるで神々しさを具現化したようなものだつた。それと同時に俺は、あなるほど、となぜか納得してしまつた。この剣は『クリスタライト』のあの神々しさをそのまま引き出しているのだ。白竜が剣になつたらこんな感じなのかな、と意味もわからないうことをふと感じる。水晶のように透き通っている剣は一見すると脆そうに見えてしまつが、そんなことはなかつた。

リズから剣を受け取ると、俺は両手に構える。手にかかる重さが心地いい。二、三度振つてみると、剣がたどつた軌跡に白銀の粒子が舞い散つた。

「剣の名前は『クラウ・ソラス』ね。確か何かの伝説にあつたかな?」

『クラウ・ソラス』。確かにケルト神話にあった神剣……。なるほど、確かにこれは神剣にふさわしいものだ。

「……すげえ」

それしか言葉に出なかつた。他に色々な言葉が浮かんだけど、口から出たのはその一言だけ。そんな俺がおかしかつたのかリズはクスクスと笑いを漏らした。

「氣に入つてもらえたかな?」

「当然!…」

これを受け取つて不満な人間などこの世にいるのだろうか。そんな奴がいたら直々に会いに行つて一発くらいグーで殴つても文句は言われないだろ?!

「本当にありがとう。大切に使わせてもらひよ」

「喜んでもらえたようになによつ」

互いに笑顔で言葉を交わしあつ。なんかこの剣をアイテムワインドウに収めるにはとてもおしい氣がする。

「なあリズ。鞄つてあるかな?」

「鞄?」

「うん。ずっと実体化させておきたいから。なにか収めるものがほしいなあ、と」

「りょーかい。ちょっと待つて」

そう言つとリズは工房の奥へと入つて行つた。俺はその間にもう一度このクラウ・ソラスを構えて何度か振つてみる。そうしてソーデスキルも試してみたりしている間にリズが工房の奥から帰つてきた。

「これとかどう?」

そういうつてリズが差し出してきた靴は、一目で大事にされていたものだということがわかつた。しっかりと細部にまで手入れがされており、大事に磨かれていたのだろう。

表面上一転の曇りもないその靴を受け取ると、鉄の冷たさが手に伝わつてくる。金色をベースに黒と白で装飾が施されている靴の中には大きなルビー、サファイア、エメラルド、ダイヤモンドが四つ埋め込まれており、その中心には一際輝きを放つクリスタルが埋め込まれていた。

「こんなのもらつてしまつていいのか?」

俺の質問にリズは満面の笑みでこう答えた。

「いいよ。その剣に釣り合つ鞄がこれしかなかつたし、何よりハヤトにはもつと大切なものをもらつたからね」

「……そつか」

リズの言葉にウソは感じられなかつた。だから俺は有り難くその行為を受け取ると、クラウ・ソラスをその鞄へと収める。そして腰

の後ろのベルトにそれを巻きつけ固定すると再びリズにお札をいった。

「本当にありがと。この一日間、本当に楽しかったよ」

「それは」いつのセリフだよ。久しぶりにあんな刺激のある体験させてもらつたし」

「そう言つて互いに笑いあつと、俺はリズに提案をした。

「剣のメンテナンスとかでまた来てもいいかな?」

リズは俺の言葉に一瞬呆けたが、意味を理解するとすぐに笑顔になつこつ言つてくれた。

「もちろん。その剣は私とハヤトにしか触らせないよ?」

「ヤリ、トリズは口をゆがませる。俺もつられてニヤリとしてしまつた。

しきりに笑いあつと、俺はドアへと歩き出し、不意にその歩みを止めた。

「せうじえば」

「ん?」

「大切なもののつて?」

「……それは教えられないよ」

言葉にできるものじゃないからね、トリズは笑った。

第五話・Claim Solais（後書き）

次回からすこし過去編に入りたいと思います。
正確にはハヤトとナギサがSAOに入ったときの話で、どうやって
二人がここまで実力をつけていったかを書いて行く予定です。次
の話まで少々お待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2567w/>

ソードアート・オンライン～神出鬼没の二人組～

2011年11月24日21時50分発行